

健苗移植と水管理の徹底で活着の促進を！

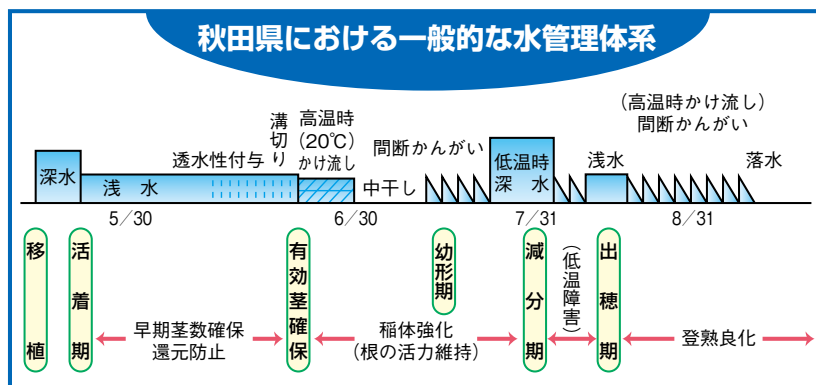
1. 田植え作業とその後の管理

1. 田植えから活着まで

- 田植え作業は、日平均気温14℃以上（中苗）、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。最高気温15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。平均14℃以上となるのは、平年であれば5月17日以降（アメダス平年値より）です。極端な早植えは控えてください。
- 植え付け本数は4本／株程度とし、3cm以上の深植えにならないようにしましょう。
- 田植え直後は、活着を促進させるため、水深4cm程度の湛水状態として保温に努めましょう（苗の活着には4～5日かかりますが、気温・水温が高いほど早くなります）。

2. 分けつを促進させる水管理

- 高品質・良食味米の生産技術として強勢（初期）分けつの確保が重要です。分けつを促進させるためには、水温の日較差を大きくすることがポイントとなります（分けつの発生最適条件は、日平均水温23～25℃です）。
- 「早朝かん水・日中止水」を基本に、気温が15℃以上の場合には浅水管理、15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。



- アオミドロや表土はく離等が発生した場合は、早朝や降雨日に水の入れ替えを行い発生を抑えましょう。

3. 雑草防除

- 発生草種および雑草の量に応じた薬剤の選択と適期の使用により、効果的な雑草防除を行います。
- 除草効果を高めるため、一発処理除草剤は「代かき日から10日以内」に使用します。代かき～移植までに10日以上かかる場合は、移植後の初期除草剤と一発処理剤の体系処理を検討してください。
- 除草剤散布時の水深は、粒剤では3～5cm、フロアブル剤やジャンボ剤では5～7cmとし、薬剤が散布しやすいようにします。
- 除草剤散布後7日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりと入水します。

2. 病害虫防除

1. いもち病防除の徹底と補植用余り苗の早期処分

本田の葉いもち病を防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。以下の点に注意して葉いもちの発生を予防してください。

- 育苗中に葉いもちが確認されたハウスの苗は移植しない。
- 本田葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施します（育苗期いもち防除剤として育苗ハウスで使用したベンレート水和剤やビームゾルは、本田まで防除効果は持続しません）。
- 管内の一部地域では、イネドロオイムシに対するプリンス剤の感受性低下が認められますので、箱施用剤の選定には注意します。
- ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になるため、補植終了後は水田の泥の中に埋めるなどして、完全に処分してください。